

『JAPAN REVIEW』 No. 2 (1991年刊) 掲載論文

二重構造モデル：日本人集団の形成に関わる一仮説

埴原和郎

要旨：日本人集団の形成史については古くからさまざまな学説が提唱された。その多くは一面の真理を語ると思われるが、石器時代から現代に至る種々のデータを全体として説明するには説得力に欠ける面もある。同時に、現在のデータや研究方法で再検討されるべき問題も少なくない。例えば Baelz が記載した、いわゆる薩摩タイプ・長州タイプの問題や、アイヌ・琉球人の系統関係などは、当時とは異なる視点から再検討する必要がある。

また、一方では、きわめて限られたデータから、日本の文化や歴史を無視した短絡的発言が行われることもあり、しかもそれが国際的に通用するという危険性をはらんでいることは無視できない問題である。

本論文で提出する日本人集団の二重構造モデルは、従来の諸説を比較検討し、また最近の研究成果に基づく統計学的分析によって得られた一つの仮説である。このモデルは次の点を骨子とする。

(1)現代日本人の祖先集団は南東アジア系で、おそらく後期旧石器時代から日本列島に住み、縄文人を生じた。(2)弥生時代から7世紀ころにかけて北東アジア系の集団が日本列島に渡来し、大陸の高度な文化をもたらすとともに、在来の南東アジア系（縄文系）集団に強い遺伝的影響を与えた。(3)南東・北東アジア系の2集団は日本列島内で徐々に混血したが、その過程は現在も進行中で、日本人は今も heterogeneity、つまり二重構造を保っている。

以上の観点から、さらに次のことが導かれる。(1)日本人集団の二重構造性は、弥生時代以降とくに顕著になった。(2)弥生時代から現代に至るまでの日本人集団の地域性は、上記2系統間の混血の割合、ならびに文化的影響の程度が地域によって異なることによって生じた。身体形質や文化にみられる東・西日本の差、遺伝的勾配なども北東アジア系（渡来系）集団の影響の大小によるところが大きいであろう。(3)アイヌと琉球人の身体形質にみられる強い類似性は、両者とも南東アジア系集団を祖先とし、しかも北東アジア系集団の影響が本土人に比べてきわめて少なかったという共通の要因による。換言すれば、弥生時代以降大きい変化を示したのは本土の集団である。

以上の諸点は単に日本人集団のみならず、ヒト以外の動物、例えば日本犬や日本の野生マウスの分布にも当てはまる。また文化現象についても二重構造モデルで説明しうる場合が多く、さらに歴史との整合性も高い。

言うまでもなく、種々の研究領域のデータの中にはこのモデルに適合しないものもあり、また日本人集団の形成過程において、上記以外の複雑な要素が関与したことも十分に考えられる。またこのモデルそのものも検討すべき多くの課題を含んでいる。しかし一方では、二重構造モデルに基づいて身体と文化に関わる諸現象を合理的に説明し得ることから、さらに多くの点についてこのモデル自体の適合性を検討し、修正を加え、理論の精密化を計ることは無意味ではないと思われる。

近代天皇の皇位継承儀礼

エイドリアン・C・メイヤー

要旨：天皇の皇位継承は、踐祚、即位礼、大嘗祭という三つの儀礼の流れから成り立っている。これらの儀礼はひとつひとつ、明治、大正、昭和の各天皇の皇位継承において記述されている。それらを比べると、変化が明らかであり、とくに大正、昭和天皇の継承においては、伝統的な要素が加えられて宗教的内容が多く含まれるようになったことがわかる。ところで皇位継承のシンボリズムと意味についての解釈は、従来、大嘗祭の研究にかぎられていた。そしてそれらに二つのアプローチがあった。第一は今の規定と祭儀の記録に基づくアプローチである。それによると天皇と神が食事を共にして天皇の精神的威力を強化することに儀式の中心がおかれていくということになる。もう一つのアプローチは、神話と伝承に基づくもので大嘗祭を天皇の変容と再生によって天皇霊を継承する機会であると解釈する。この論文は、それらの方法とは対照的に三つの一連の儀礼を含めた解釈、すなわちそれらの儀礼において天皇と神がつぎつぎと密接に交流するプロセスを主たるテーマとする解釈を提示するものである。おわりに、天皇位の本質について考察する。それは、一方では日本人の間で一般的に抱かれている神の考えに関連し、他方では、ヒンズー教世界の王権における同種の問題にかかわっている。結論として、王位継承儀礼に含まれる神的なものは一時的で相互連関的なものであるが、それはやがてよりいっそう一般的な高位や神聖性へと上昇していくということ、そして日本のケースは、他国の王位継承にもみられる状況の一例であるということを述べた。

『金閣寺』現実と復讐

鶴田欣也

要旨：『金閣寺』は三島由紀夫の代表作のひとつだというのが一般の見方だが、これは彼の最高作品だという評価もある。しかし、中村光夫や小林秀雄はそういう評価には反対している。理由は主人公の溝口である。溝口の内部の発展に国宝金閣寺を焼かねばならないという必然性が認められないというのである。ただ、溝口の内部の発展を詳細に分析した研究はこれまでなかった。この論文は溝口の内的進展を分析してこの作品の深層に迫ろうとするものである。

溝口には相反する発展の軌跡がある。ひとつは人生を受け入れ、生きていこうとする軌跡であり、もうひとつは人生に復讐しようとする軌跡である。生命の勢力は主人公を惹きつけると同時に脅かす数人の女性によって代表されている。一方、主人公の父親とその代理である金閣寺は生命の反対である永遠性と美を指向している。このような相反する勢力を分析してみると、ひとつのレベルでは溝口は美から離れ、人生を受け入れる方向に向かっているのだが、同時に、もうひとつのレベルでは人生に復讐しようとする方向にも動いていることが分かる。小説が進むにつれ、溝口は女性に次第に接近していくのだが、接近すればするほど、女性は美しさや品位を失っていく。金閣寺の美から離れ、人生（女性）に近づくにつれ、人生がその輝きを失っていくという矛盾である。この作品の最後に有名な一行がある。「仕事を終へて一服して

ある人がよくさう思ふやうに、生きようと私は思った。」ひと仕事終えて一服している人は「生きよう」などとは思わないものだ。この有名な文章に含まれた矛盾は作品の内部、とくに主人公の内部の矛盾——人生を受け入れると同時にそれを罰したいという——を象徴している。

いのちの概念

森岡正博

要旨：本論文の目的は、現代日本における「いのち」のイメージと概念を検討することによって、生命と科学技術をめぐる国際的議論に貢献することにある。英語の'life'に当たる日本語は「いのち」である。しかし、「いのち」と'life'のニュアンスは場合によって異なるので、本論文では「いのち」という言葉を用いて議論を進めることにする。我々はまず「いのち」の語義上の意味を検討し、我々の行ったアンケート調査や出版物の中に現れた「いのち」のイメージの、いくつかの重要な特徴について考察する。ついで、我々は「いのち」の概念の哲学的・形而上学的解釈を提案する。最後に、生命学の簡単なアウトラインを紹介し、生命倫理や環境問題に関する諸問題を研究する新しい方法を示唆する。

怨みの構造

久野 昭

要旨：「怨み」が日本人の情緒及び文化の文脈の中で持つ独自の構造を明らかにすることが、本稿の意図である。その「うらみ」が「うら」（裏）に由来する「うらむ」の名詞形であること、そしてその「うら」が、「おもて」（表）とは対照的に、「心」にかかわるものであることは、言うまでもない。我々は本稿でいくつかの日本語を取り上げるけれども、我々にとって問題なのは、言語学的でなく現象学的な「怨み」の構造であって、そのような観点から我々は、主として「裏」「表」および「思い」とかかわる様態において、「怨み」とよばれる現象を特徴づけたい。

ゲオルグ・マイスター：17世紀の庭師および彼の東洋庭園論

ウィーベ・カウテルト

要旨：1692年、ドイツ・ドレスデンで東洋の庭園に関する初めてといえる詳しい本が出た。著者はゲオルグ・マイスター。ドイツ・テューリングゲン生まれの庭師でオランダ東インド会社の兵士として東洋の紀行を主に書いた“東洋園芸庭園師”という書物である。

園芸・造園の分野から見た東洋情報として非常に早い時期にヨーロッパに伝えられ、しかも多くの東洋園芸植物が紹介された。その中には日本国内で大衆が好んで植えていたと思われる

植物が90種も紹介されている。彼自身が持ち帰った植物はヨーロッパ内の有力な植物蒐集家達に配られ、本とともにたいへんな関心と呼んだ。

本書の中でとくに注目に値するのはマイスターの「発見」した日本庭園の自然らしさであろう。当時流行していたいわゆる整形式のフランス式庭園に反して、マイスターによる神がつくったであろうと思われるほどの“日本庭園の自然らしさ”についての情報は、ヨーロッパの庭園様式の主流がイギリス風景式庭園へ転回する影響を与えたであろう。マイスターがヨーロッパに帰った後の活動はまだ不明な点が多く、本稿はもっぱら植物学ならびに庭園史の資料として彼の著書を紹介する。

鬼界カルデラの噴火が屋久島の完新世の植生変遷史に 及ぼした影響について

安田喜憲

要旨：屋久島の花之江河湿原の花粉分析の結果、6300年前に噴火した鬼界カルデラによる幸屋火砕流堆積物によって、古屋久杉やヤマグルマからなる古花之江河湿原周辺の森林は壊滅的打撃を被ったことが、明らかとなった。現在の新花之江河湿原は約2500年前に形成された。

講演

日本人の「あの世」観

梅原 猛

日本の開国

マリウス・B・ジャンセン

中国医学の原形はいかにして形成されたか

山田慶兒